

岩美病院薬剤部

薬剤師 高岡 清



《薬はあなただけのもの》

ある日、窓口で歯痛止めの薬をお渡ししました。「昨夜、歯が痛くて市販のイタミ止めのをのんだけど、これは一錠でいいの。あつちは二錠だったけど」

70歳代の女性が、不審そうな表情で訴えられました。余程、昨夜は歯が痛くて苦しまれたようです。質問の意味も彼女の不安もとてもよく理解できました。それで私は、こうお答えしました。

「店に売っている薬と病院から貰う薬は、全く別のものだと思ってください。昨夜の薬のことは忘れて、今日はこれを一錠のんでください。〇〇さんにはこれが一錠でちょうどいい量です」

他の答え方もあるでしょうが、これが私の頭に浮かんだ回答でした。笑い話のようですが、こういう質問は珍しくありません。中にはこんなこともあります。

「私もあの人と同じ薬をもらって、袋には二錠のめって書いてあるけど、あの人は一錠のむようになつとるらしいし、心配だけ私も一

錠のんどる」

これでは、笑い話にもなりません。

《薬剤師には何がやれるか》

こんな場面に出会ってみて考えるのは、薬剤師はもつと外へ出て行かなくてはいけないという反省です。薬の正しいのみ方などという以前の問題として、薬とは何か？何のために薬をのむのか？そもそも薬が必要なのか？そんなことも、一緒に考えてみるべきだろうと思います。入院して薬をのんでおられる方に薬に関わる話をするのも薬剤師の仕事の一つです。この薬はこうでああでと、話した後には「薬のことは全然分かりません。全て先生にお任せしとりますから」とおっしゃる方があります。それはそうかも知りませんが、薬剤師の前では言っていない言葉だと私は思っています。信頼されるのはうれしいことです。が、病気と一緒に癒していきましよう。与えられたからのんでいるでは、効果もきつと違います。

《安心感を与える薬に》

私たちは体調が崩れると当たり前のように薬をのみます。薬をのむと、何だかそれだけで安心するものです。安心感というのはい言葉です。しかし、ただ安心してばかりいないで、どういう仕組みで薬が体調を治してくれるのかを、ちょっと薬剤師に教えてもらつともつと安心するのではありませんか。薬剤師がその一翼を担っているのは光栄なことです。安心感を与えるはずの薬で、不安感を誘い出すことがないように。私たち薬剤師の使命だと考えています。

岩美病院

運営協議会が

開催されました

岩美病院の健全な経営を図るため、岩美病院運営協議会（構成 知識経験を有する者3人 事業管理者が必要と認めた者 4人）を設置し、必要な事項を調査審議することになっていきます。本年度も2月3日に3回目の協議会が開催され、公立病院改革プラン（岩美病院版）についての協議が活発に行われました。

これは、病院を設置する地方公共団体は、平成20年度中に公立病院改革プランを策定し、病院経営の改革に総合的に取り組むことになっているためです。プラン策定後は、年1回以上点検・評価・公表することになっており、毎年見直しを行っていきます。

なお、委員は、植田武郎さん、田村節子さん、鍵井廣幸さん、植田憲治さん、日下部武志さん、湊孝明さん、松本享子さんです。

